

22 歳男性

三日に渡るワークショップは、今までとは趣の違った新鮮なものでした。今回のワークショップで見つけた、一貫したテーマは「言葉」でした。

一日目は、心中で決着を付けたようで、どこかもやもやしていた問題を、言葉に出すことによって具体化しました。具体化してみると、その問題が自分で思っていたよりも大きく、心のしこりになっていたことに気がつきました。そしてその問題に対して自分で言葉を投げかけることによって、今まで目を逸らしてほったらかしにしていた感情に折り合いがつかれました。

二日目は自分の内側から、自然に出てくる言葉を探るのが命題でした。何も考えなくても筋道だった言葉が出てくる、それも適当な事をペラペラ喋るのではなく、自分自身が一番納得のいく形で言葉が創られていく。不思議な体験でした。

三日目は、自分が 10 年後、危機的な状況に追い込まれたという設定でアドリブ演劇をしていきました。「10 年の間、何もせず、のうのうと生きてきた」という設定で劇を進めた僕は、浴びせられる非難の声や逃げ場の無い重圧に、一度は完全に心が折れてしまい、突き付けられた状況に対して降参してしまいました。情けなくなってきた涙も出ました。しかし、途中で投げ出すわけにもいかないので、押し黙ったまま時間が過ぎていきました。そこから持ち直すことができたのは、これが演劇だったからです。現実では過ぎ去った歳月は取り戻せません。「10 年の間、何もせず、のうのうと生きてきた」という設定は僕が考える最悪の 10 年ですが、そうなる可能性があるからこそ、演劇でシミュレートする必要がありました。その結果は、失った歳月はどうしようもなく、将棋やチェスで言うところの「詰み」の状態に陥った自分が見えてきました。こうなってしまうのは、過去の自分を変えるしか手立てがないと思った僕は、「10 年間に色々なことに積極的に取り組んできた」と自分の設定をいい様に書き換えて、その自分を信じきったことで劇を進める力を得ました。そこからは、自然に言葉が出てきて演劇にいい形でピリオドを打つことができました。

僕がこの演劇で最後に放った言葉には責任が伴います。10 年後に胸を張って生きているように、今をしっかりと丁寧に積み重ねていく。参加者の方々にそう宣言したからです。僕の言葉に真剣に耳を傾けてくれた人たちがいる。生き証人がいる。この宣言を無下にして 10 年を過ごすことはあまりにも無責任。言葉は重いものだと痛感しました。一旦人様に話したことは、撤回するのは非常に難しい。聞いてくれた人の記憶までは消せないから。僕は今まで少々、無責任にあれこれ意見してしまうところがありましたが、今回のワークショ

ップで自分が放つ、言葉と言うものに対して真摯になれました。

今回、このような貴重な気づきを与えてくださった、木戸さん、優磨さん、安田さん、本当にありがとうございました。皆さん、とても真剣に真正面から僕と向き合ってくださいました。安田さんは、3日ほどしか一緒に過ごせなかったにも関わらず、がっぷり四つで僕と組み合ってくださいました。皆さん無しでは僕の3日間は成立しなかったでしょう。ありがとうございました。